

Index

薬の温故知新：軽度認知障害治療薬の治験が始まりました	1～2
表彰	3
第8回所内研究討論会	3
学会レポート	4～5
海外学会レポート	5

研究室紹介	6
平成27年度厚生労働省科学研究費補助金等	7
研究所外部評価委員会の評価結果報告について	8
老年学・老年医学公開講座開催予定	8
主なマスコミ報道／編集後記	8



P.4～5 学会レポート

薬の温故知新：軽度認知障害治療薬の治験が始まりました

老脳神経科学研究チーム 研究員 柳井 修一

新聞やテレビでは、新しい技術の発明や、このような技術がもたらす将来の豊かな生活について毎日のように報道されています。しかし、画期的・革新的な技術は、何も無いところから突然現れるわけではありません。研究者たちは、過去の多くの失敗から学び、あるいは過去の研究を発展させることで、長い時間をかけて様々な科学技術を手に入ってきました。そして、私たちの身近にある科学技術は、長い時間をかけてできあがった結晶であり、先人たちの膨大な経験から生み出された温故知新の賜物なのです。病気の治療に必要な不可欠な薬の多くも、開発段階で先人の知識を基にして幾多の困難を乗り越え、私たちの手元に届きます。ひとつの治療薬の開発には、10年以上の歳月と300億円以上の費用が必要と言われています。さらに、最終的に承認される治療薬は、開発されている薬全体の10%程度です（図1）。本来、薬の開発には莫大な時間と費用が必要ですが、現在処方されている薬の「温故知新」によって、より早く、より安価に私たちの手元に薬を届けることが可能になります。

薬の温故知新とは、旧来の薬が持つ新たな薬理作用を発見して、これまでとは異なる病気の治療薬として利用することを指します。適用する病気の範囲を広げるという意味で、薬の適用拡大と呼んでいます。薬の適用拡大では初期の開発段階（図1の基礎研究と前臨床）をスキップして治験から始められるため、薬の開発に必要な時間と費用を大幅に減らすことができます。例えば、催眠鎮静剤として用いられていたサリドマイドは、過去に重大な薬害を引き起こしたことによりいったん医療現場から姿を消しました。ですが、その後催眠鎮静作用とは異なる新たな薬理作用が発見され、現在では癌の治療薬として用いられています。また、増毛剤として有名なミノキシジル（リアップ®）も、元々は高血圧の治療薬として開発されていたものです。私たちが服用した薬は、特定の臓器、器官、組織に対してだけでなく、標的としていない臓器でも作用を発揮します。これは多くの場合に副作用を引き起こしますが、サリドマイドやミノキシジルのように本来とは異なる臓器や病気へと薬を適用拡大することは「良い」副作用と言えるでしょう。

このような適用拡大の一つとして、我々は「血液サラサラ薬（抗血小板薬）」として脳梗塞の再発予防に処方されているシロスタゾール（プレタール®）が認知症の予防、改善に使えるのではないかと考えました（図2）。高齢化が進む日本において、認知症は大きな問題になっています。認知症は、当センターが掲げる重点医療の一



図1

つであり、多くの研究室で様々な観点から研究が行われています。認知症の予防、改善目的でいきなりシロスタゾールをヒトへ適用することはできないため、我々は実験用のマウスにシロスタゾールを投与して、記憶機能が向上するかどうかを調べました。マウスとヒトの外見は大きく異なりますが、マウスとヒトでは遺伝子の99%が共通していることがわかっています。また、年齢や性別など集団が持つ特性、さらに薬の投与期間などの実験操作を容易にコントロールできるため、マウスはヒトの病気の原因やその治療法を探るためのモデル動物として広く使われています。アルツハイマー病や高血圧など、ヒトの病気と同じ症状を示す病態モデルマウスも多く存在します。

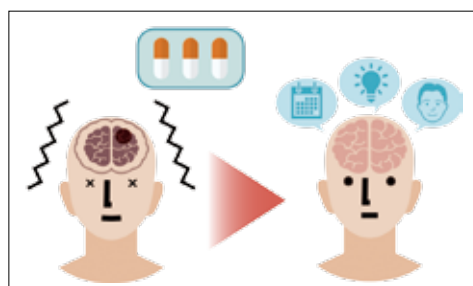


図2

“台”は水面下にありマウスが直接見ることはできないため、プール外の目印と台との位置関係を覚えなければなりません。これは、私たちが通りの目印を使って、自宅からスーパーマーケットや病院への道順を覚えることと似ています。マウスは水が嫌いなので、水から逃れようというところを泳ぐうちに台へたどり着きます(図3左)。最初は台にたどり着くまでに時間がかかりますが、そのうちプール外の目印と台の位置関係を覚えて、素早く台へ到達できるようになります(図3中央)。このようにして台の位置を覚えさせた後、台を取り除いてマウスを泳がせました。台の場所を覚えていれば、台があった場所を頻繁に訪れると考えられます。これは、

久しぶりに訪れたスーパーマーケットがなくなっていたとき、そこに佇んだり、周りを探したりする私たちの行動と同じです。このようにして、マウスの行動を解析することで記憶を評価することができるのです。

シロスタゾールを投与していないマウス(非投与)がテスト中に“台”の場所を訪れた回数は平均3.5回程度でした。これに対し、シロスタゾールを投与したマウスが台の場所を訪れた回数は2倍の平均7回でした(図3右)。シロスタゾールがマウスの記憶機能を向上させたのです。私たちもマウスも目的地へたどり着くためには、道順を“覚えること”と覚えた道順を“思い出すこと”が必要で、いずれにおいても正確性が求められます。シロスタゾールには、場所を正確に覚えること、そして正確に思い出すことを促進する効果があると考えられます。ここで話した実験では、若いマウスを使っていますが、ヒトと同様、高齢のマウスは記憶機能が悪くなることが知られています。シロスタゾール投与は、高齢マウスの低下した記憶を若いマウスと同程度にまで改善することも確認しています。

一方、ヒトの場合には、シロスタゾールが初期のアルツハイマー病で見られる記憶機能の低下を先送りできる効果があることがわかってきました。実際、国立循環器病センターが中心となって「軽度認知障害治療薬」としてシロスタゾールの治験(臨床第Ⅱ相)が始まっており、当センターも東日本の基幹病院としてこの治験に重要な役割を担っています。1日あたりの薬剤費が500円前後の既存の認知症治療薬(アリセプト®、イクセロン®、レミニール®、メマリー®)と比較して、シロスタゾールはジェネリック(後発薬)が存在するため、1日あたり30円弱と安価です。近い将来、シロスタゾールが認知症へ適用されると、認知症の症状改善や重篤症状の先送りに貢献するとともに、日本全体の医療費の削減にもつながることが期待されます。

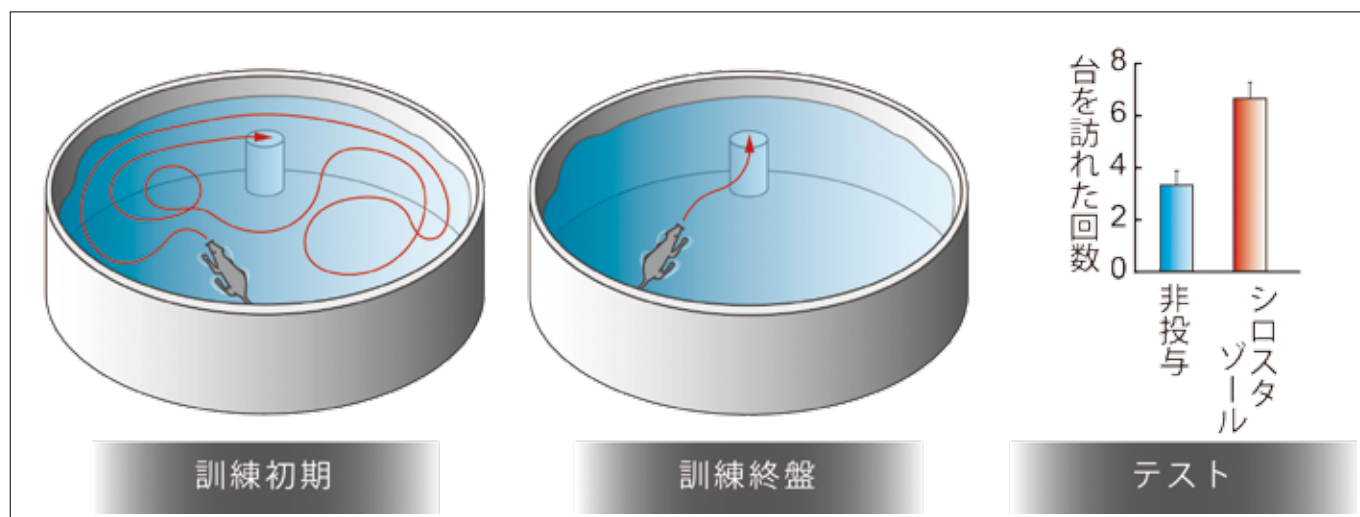


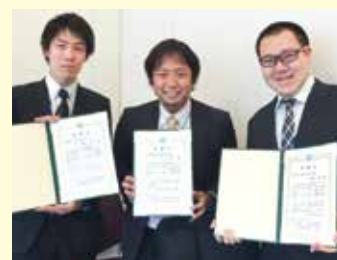
図3



平成26年度日本放射線技術学会技術新人賞

神経画像研究チーム 技術員 我妻 慧

日本放射線技術学会での平成26年度技術新人賞（核医学分野）を受賞しました。技術新人賞とは、放射線技術学に関わる35歳以下の者（主に診療放射線技師）の研究を奨励するため、日本放射線技術学会が授与する賞です。 ^{57}Co 面線源を用いた核医学検査装置の日常点検法の構築と薬剤供給の異なる ^{18}F -FDG PET 検査の臨床画像の画質比較に関する論文2編が評価され、目標であった新人賞を受賞できました。この受賞を励みに、研究活動に専念していききたいと思います。



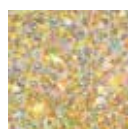
技術新人賞受賞者らと（右が筆者）



第29回日本老年学会総会合同ポスターセッション優秀演題賞

老化脳神経科学研究チーム 研究員 渡辺 信博

当研究チームでは、膀胱の排尿収縮が、軽微な皮膚刺激により抑制されること、また同様の皮膚刺激方法でも、皮膚接触面の素材の違いにより排尿収縮への作用が異なることをラットで見出しました。今回、これまでの基礎研究により見出された排尿抑制作用のある皮膚刺激方法を、無作為二重盲検交叉試験で地域在住の高齢女性に実践していただいたところ、ラットで効果を示した刺激方法により、過活動膀胱による夜間頻尿が緩和しうることを報告しました。軽微な皮膚刺激は、高齢者の排泄問題に対して有用なセルフケア方法になりうると考えられます。



第8回所内研究討論会

神経画像研究チーム 研究員 石橋 賢士

自立促進と介護予防研究チーム 研究員 佐久間 尚子

7月13日、第8回所内研究討論会が開催されました。自然科学系と社会科学系の合同開催の2回目となる今回は、藤田泰典研究員（老化機構研究チーム）と天野秀紀研究員（社会参加と地域保健研究チーム）の司会のもと、ポジトロン放出断層撮影（PET）画像を用いた脳機能と血糖値の関連に関する研究報告と、地域在住の高齢者を長期に追跡して行われた調査データを用いた脳機能とタンパク質との関連に関する研究報告が行われました。約50名の参加を得て、最新の話題提供と活発な質疑応答が行われ、たいへん充実した会でした。以下に発表者のコメントを紹介します。



発表者 石橋 賢士 研究員（神経画像研究チーム）

「FDG-PET からみた糖尿病とアルツハイマー型認知症の関係」

加齢と脳機能との関係を調べるFDG-PET研究から、血糖値が上昇すると、健常者でもアルツハイマー型認知症に関連した領域で脳機能が低下し得る現象について報告しました。この現象の解釈について、異なる分野の多くの先生方から貴重なご意見をいただくことができ、大変有意義な討論会でした。

発表者 稲垣 宏樹 研究員（自立促進と介護予防研究チーム）

「地域在住高齢者における3年間の認知機能と血漿タンパク質の変化」

国内4地域で70歳、80歳、90歳、100歳を長期に追跡する調査＝SONIC研究の紹介と、その中で自然科学系と社会科学系が協力して実施している研究の一端として、認知機能と血漿タンパク質の経時変化に関して報告しました。参考になる視点やご意見を多数頂戴し、幾つかについてはすぐにデータを取り寄せ解析の準備を進めています。これを機に、この討論会の内外で両研究系の交流や共同研究が活性化したら大変嬉しく思います。

学会レポート

～日本老年学会総会合同大会が開催されました！～

日本老年学会総会合同大会を盛会裡に終えて

理事長 井藤 英喜

平成27年6月12日から14日までの3日間にわたりパシフィコ横浜で日本老年学会総会合同大会が開催されました。本合同大会は、老年学会及び関係する7つの学会（老年医学会、老年社会科学会、基礎老化学会、老年歯科医学会、老年精神医学会、ケアマネジメント学会及び老年看護学会）が、同時に総会を開催するという大規模な学会です。

最終的に、有料参加者は約8,800人で、例年の6,000人前後とくらべ明らかに多く、盛会裡に学会を終えることができました。読売新聞の朝刊の一面に高齢者の身体的、精神的若返りが顕著となってきたという学会のシンポジウムの発表が取り上げられるなど多くの反響のあった学会でした。学会の成功には、学会の準備に当たり、メインテーマを「良質な超高齢社会を拓く一学際的研究の進展と深化をめざして」と定め、このメインテーマに沿って、従来企画されることのなかった合同シンポジウムを10課題設け、各学会の専門性を超えて多方面から超高齢社会が直面する問題を討議したことがあげられます。

この学会では、私が老年学会、当研究所の高橋副所長が老年社会科学会、遠藤副所長が基礎老化学会の会長を務めました。学会の運営、企画にあたっては研究所、病院の多くの方々の多大なご協力をいただきました。改めて心よりの感謝を申し上げます。



会長基調講演

第57回日本老年社会科学会を終えて

副所長 高橋 龍太郎

6月12日から14日にかけて、パシフィコ横浜を会場に老年学関係7学会共催の老年学会が開催され、私は老年社会科学会の大会長を務めました。合同の学会は2年ごとで、その間にそれぞれの学会単独の開催が行われます。老年社会科学会も、昨年は岐阜県の下呂温泉を会場として行われ、来年は愛媛県の松山市で予定されています。合同の学会のときは大都市部の会場でないといふ参加者を収容しきれないのですが、単独のときは、あまり学会参加で行ったことのないような都市も多く、このサイクルもいいのではないかと感じました。

さて、今回の学会は、会場の運営全般を他に委託して行われたため、会期中あまりばたばたすることなく無事に終えることができました。また、準備段階でも、石崎達郎研究部長や藤原佳典研究部長を始め、研究所の皆さんのご協力をいただき大変助かりました。感謝申し上げます。

私の講演でも触れたことですが、我が国では、老年学会という老年学を包括した学会があまり機能していませんでした。今回、初日から2日目にかけて合同シンポジウムを多く企画したりして、今までにない学際的な内容になりました。ぜひこの方向性を消すことなく今後も進めていってほしいと思います。



第38回日本基礎老化学会大会を開催して

副所長 遠藤 玉夫

井藤英喜理事長が会長の第29回日本老年学会総会の一環として第38回日本基礎老化学会を開催しました。複数の学会による共同プログラムを積極的に取り入れる、という方針のもと、基礎老化学会は老年社会学会との共同シンポジウム「健康長寿をのばす老年学—基礎研究と社会研究の融合をめざして—」を企画したところ、たくさんの方々会場に入りきれずあきらかに大盛況でした。このシンポジウムは、自然科学と社会科学の総合力によって老年学の課題を解決しようとする我々の研究所の方針そのものであり、この研究方向は老年学研究者の指針となっていることを示していると考えられます。また、合同ポス



大会長挨拶

ター発表において、基礎老化学会の3演題のうち2演題が優秀賞を受賞し、基礎老化学会の研究レベルの高さを示すことができました（そのうち1演題は、当研究所の老化脳神経科学研究チームの渡辺信博研究員の発表：P3参照）。そして、国際交流に向けた日韓合同シンポジウムを行うとともに、老年医学会の基礎医学的な発表を基礎老化プログラムに組み込んで合同会の意義をより深いものにしました。さらに、奨励賞は3名を予定していましたが、激戦のため4名を表彰することになり、若手の研究もレベルが上がっていることを実感しました。基礎老化研究の重要性をアピールすることができた大会だと思います。



共同シンポジウムの座長と演者

海外学会レポート

国際学会「Aging Families/Changing Families(高齢化社会の変わりゆく家族)」に参加して

福祉と生活ケア研究チーム 研究員 涌井 智子



シラキュース大学

米国ニューヨーク州にあるシラキュース大学で、国際学会「Aging Families/ Changing Families」が開催されました（6月3日～6日）。国際社会学会の「エイジング」部会と「家族」部会による共同開催で、高齢化する国際社会の変わりゆく「家族」がテーマです。情緒的な支えであり、手助けを頼める心強い存在である「家族」が持つ意味は、高齢になるほど重要になります。

学会は、米国における「結婚という社会的制度の崩壊」について研究している Andrew Cherlin 教授（ジョンズホプキンス大学）の講演から始まり、結婚という制度を超

えた「家族」、離婚や再婚、レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー（LGBT）など、変わりゆく「家族」の扶養意識や介護行動について、世界各国の家族事情を反映した報告がされました。私からは、介護保険導入以降、日本の家族介護が多様化しており、嫁介護者から息子や配偶者介護者らに移行している現状を報告し、これらの変化が介護保険制度を考えるうえでどのように影響するかについて議論を行いました。議論は白熱し、超高齢社会の日本が、いかに継続的な介護保険システムを構築していくかということは、世界の研究者が注目する課題なのだとすることを改めて感じました。今後も積極的に情報発信に努めたいと思います。



講演を熱心に聞く参加者

研究室紹介

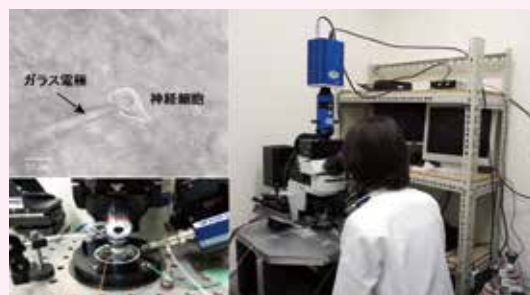
老化脳神経科学研究チーム 神経生理

～研究紹介～

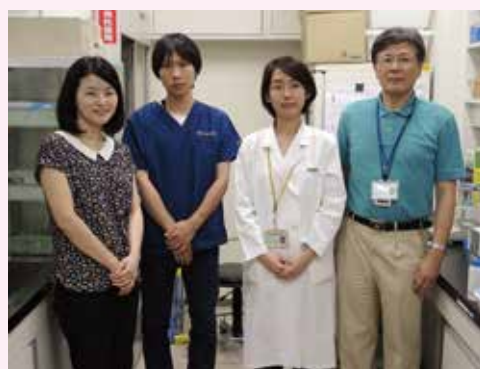
私たちの研究室では、疾患モデル動物を使って脳神経系の病気の仕組みを調べています。神経系の働きには、認知機能や運動制御があります。日常生活において、物事を記憶したり学習したり、自分が今どこにいるかを自覚して適切に行動できるのは神経系の働きのおかげです。

その中でも、順序だった行動や習慣化、そして滑らかに行動するには「大脳皮質－大脳基底核－視床」の神経回路が働いています。私たちはこの「皮質－大脳基底核－視床連関」の働きについて生理学的な手法で研究しています。

現在、病気に関係する遺伝子を改変したさまざまな病態モデルマウスが作り出されて来ています。しかし、その病態生理の研究はまだこれからです。これまで解析を行ってきたマウスには大脳基底核に関するパーキンソン病や歯状核赤核－淡蒼球ルイ体萎縮症、ハンチントン病などに加え、筋萎縮性側索硬化症、心的ストレス障害（PTSD）、躁うつ病、正常圧水頭症があります。私たちはこのような病態モデルマウスの解析を通じて、病気のメカニズムの解明を目指しています。



神経細胞と電気記録装置



研究室のメンバー
左から安藤、福田、井上、三浦（テーマリーダー）

福祉と生活ケア研究チーム 終末期ケアのあり方

～研究紹介～

私たちの研究室では、人が必ず、しかも一度しか経験しない死に向かうプロセスを支援するための研究をしています。現在の日本では、人が亡くなっていく過程に居合わせたことがない方が多くいます。この状況で、多死時代を迎えることになり、いかに最期を迎えるかについて、個人レベルや政策において議論することが求められています。

人生の最期の過程で、失われていく生命力に合わせて、引くことが求められ、その分その人のありのままの生を援助する機能が重要になります。終末期ケアの研究は、人生の最期における医療と支援の最良のバランスを求めて、本人や家族が高齢期最期のプロセスを受け止められるための心理的な準備と死別後の支援、そのプロセスにおける医療のあり方、高齢者の生活を支える介護職や看護職による看取りケアをテーマにしています。研究を通じて、誰もがいずれは死に向かう存在として生きること、死なないように生きることではなく自分らしく生きることが優先される社会づくりをめざしています。



後ろ左から 中里、稲松、野本（茂）、平山
前左から 野本（恵）、島田

平成27年度厚生労働省科学研究費補助金

平成27年7月現在

研究分担者 氏名（研究チーム）	研究課題	確定金額 （全体） 千円単位	確定金額 （持分） 千円単位	備考
政策科学推進研究事業				
石崎 達郎 （福祉と生活ケア）	地域包括ケア実現のためのヘルスサービスリサーチー二次データ活用システム構築による多角的エビデンス創出拠点		850	研究代表者：田宮 菜奈子 （筑波大学）
厚生労働科学特別研究事業				
石崎 達郎 （福祉と生活ケア）	後期高齢者の保健事業のあり方に関する研究		300	研究代表者：鈴木 隆雄 （国立長寿医療研究センター）
循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業				
石崎 達郎 （福祉と生活ケア）	70 歳、80 歳、90 歳の高齢者の歯・口腔の状態が健康長寿に及ぼす影響についての前向きコホート研究		50	研究代表者：前田 芳信 （大阪大学）
増井 幸恵 （福祉と生活ケア）			50	
難治性疾患等政策研究事業				
田中 雅嗣 （老化制御）	ミトコンドリア病の調査研究		300	研究代表者：後藤 雄一 （国立精神・神経医療研究センター）
村山 繁雄 （老年病理学）	神経変性疾患領域における基盤的調査研究		500	研究代表者：中島 健二 （鳥取大学）
村山 繁雄 （老年病理学）	プリオン病のサーベイランスと感染予防に関する調査研究		1,000	研究代表者：水澤 英洋 （国立精神・神経医療研究センター）
森 聖二郎 （臨床研究推進センタ-）	早老症の実態把握と予後改善を目指す集学的研究		300	研究代表者：横手 幸太郎 （千葉大学）
濱野 慶朋 （腎臓内科）	難治性血管炎に関する調査研究		300	研究代表者：有村 義宏 （杏林大学）
杉原 毅彦 （膠原病・リウマチ科）			300	
長寿科学総合研究事業				
枝広 あや子 （自立促進と介護予防）	要介護高齢者の経口摂取支援のための歯科と栄養の連携を推進するための研究	3,900	3,900	
認知症対策総合研究事業				
栗田 圭一 （自立促進と介護予防）	認知症非薬物療法の普及促進による介護負担の軽減を目指した地域包括的ケア研究		600	研究代表者：鳥羽 研二 （国立長寿医療研究センター）
障害者対策総合研究事業				
栗田 圭一 （自律促進と介護予防）	精神科病院に入院する認知症高齢者の実態調査－入院抑制、入院期間短縮、身体合併症医療確保のための研究		900	研究代表者：前田 潔 （神戸学院大学）
地域医療基盤開発推進研究事業				
石崎 達郎 （福祉と生活ケア）	社会的責任にこたえる医療の基盤となる診療ガイドラインの課題と可能性の研究		450	研究代表者：中山 健夫 （京都大学）

平成27年度国立研究開発法人日本医療研究開発機構(AMED) 研究開発委託費(旧厚生労働省科学研究費)

平成27年7月現在

研究分担者 氏名(研究チーム)	研究開発課題	確定金額 (全体) 千円単位	確定金額 (持分) 千円単位	備考
難治性疾患等実用化研究事業				
田中 雅嗣 (老化制御)	ミトコンドリア病に合併する高乳酸血症に対するビルビン酸ナトリウム治療法の開発研究ー試薬からの希少疾病治療薬開発の試みー		2,600	研究代表者: 古賀 靖敏 (久留米大学)
村山 繁雄 (老年病理学)	剖検診断された PSP / CBD / FTLT - tau の分子病理		650	研究代表者: 戸田 達史 (神戸大学)
村山 繁雄 (老年病理学)	Multiproteinopathy としての神経病理学的検討		500	研究代表者: 小久保 康昌 (三重大学)
村山 繁雄 (老年病理学)	進行性核上性麻痺及び類縁疾患を対象とした多施設共同コホート研究によるバイオマーカー開発と自然歴の解明		504	研究代表者: 池内 健 (新潟大学)
金田 大太 (神経内科)	ミトコンドリア病レジストリシステムの構築、ミトコンドリア病診療ガイドラインの策定		150	研究代表者: 村山 圭 (千葉県がんセンター)
長寿科学研究開発事業				
大淵 修一 (福祉と生活ケア)	住民との協働による介護予防のまちづくりの効果検証のための地域コントロールトライアル	16,587	16,386	
平野 浩彦 (自立促進と介護予防)	要介護高齢者等の口腔機能および口腔の健康状態の改善ならびに食生活の質の向上に関する研究	17,712	14,811	
吉田 英世 (自立促進と介護予防)	ロコモティブシンドロームの発症要因に関する研究		1,200	研究代表者: 吉村 典子 (東京大学)
重本 和宏 (老年病態)	サルコペニア診断の新バイオマーカー候補の臨床的研究		1,200	研究代表者: 原田 敦 (国立長寿医療研究センター)
金 憲経 (自立促進と介護予防)	地域在住後期高齢者における sarcopenic obesity の早期予防のための包括的介入プログラムの効果検証ー RCT による検討ー		1,200	研究代表者: 原田 敦 (国立長寿医療研究センター)
認知症研究開発事業				
吉田 英世 (自立促進と介護予防)	検証コホート研究: 農山村の地域住民における認知症の縦断的疫学研究		2,000	研究代表者: 下方 浩史 (名古屋学芸大学)
障害者対策総合研究開発事業				
村山 繁雄 (老年病理学)	双極性障害等の気分障害のリソース構築		2,350	研究代表者: 加藤 忠史 (理化学研究所)
村山 繁雄 (老年病理学)	異常タンパク伝播仮説に基づく神経疾患の画期的治療法の開発 PSP、CBD、AGD について判定の基準の作成		1,500	研究代表者: 長谷川 成人 (東京都医学総合研究所)
再生医療実用化研究事業				
豊田 雅士 (老年病態)	糖鎖マーカーに着目した細胞の長期保存後における細胞特性の解析		4,500	研究代表者: 梅澤 明弘 (国立成育医療研究センター)

研究所外部評価委員会の評価結果報告について

平成27年3月に開催した外部評価委員会の評価結果等について、報告書「外部評価委員会評価報告書（平成26年度・中間評価）」を公表しました。外部評価委員会では、各研究チームが実施しているテーマ研究や東日本大震災被災者支援研究及び長期縦断研究に関して、研究成果と計画の実現可能性についての評価が行われました。外部評価委員からは、研究を推進するための貴重な意見や助言が寄せられました。この評価結果は、平成27年度に各研究室に配分する研究費の決定に活用されるほか、研究計画の見直しにも活用します。

「外部評価委員会報告書」は研究所ホームページでご覧いただけます。http://www.tmghig.jp/J_TMIG/about/gaibuhyouka.html

東京都健康長寿医療センター研究所 研究所外部評価制度

検索 クリック！

老年学・老年医学公開講座 開催予定

手話通訳あり。

第140回老年学・老年医学公開講座

「医療と介護の今を支える最先端テクノロジー」

日時：平成27年11月2日(月) 13:15から16:30まで

場所：北とぴあさくらホール(定員1,300名)

東京都北区王子1-11-1

最寄り駅 JR京浜東北線 王子駅北口 徒歩2分

東京メトロ南北線 王子駅5番出口直結

都電荒川線 王子駅前駅 徒歩5分

事前申込不要
入場無料
入退場自由

第141回老年学・老年医学公開講座

「認知症とともに生きる」

日時：平成28年1月19日(火)

場所：文京シビックホール大ホール(定員1,800名)

主なマスコミ報道

H27.5 ~ H27.7

老化制御研究チーム

研究部長 石神 昭人

- 「肌ホネ血管若さのカギ ビタミンパワー決定版」

(NHK「ためしてガッテン」H27.6.17)

社会参加と地域保健研究チーム

研究部長 新開 省二

- 「60歳以上は『やせ』に注意！」

(ホンダ健康保険組合「へるすさろん」No.16 H27.5.15)

社会参加と地域保健研究チーム

非常勤研究員 成田 美紀

- 「＜病気・介護予防＞効果を高める食事」

(高齢者住宅新聞社「月刊エルダリープレス」H27.5.16)

自立促進と介護予防研究チーム

研究部長 栗田 圭一

- 「認知症を語る：思いに耳を傾け、信頼関係」

(読売新聞社「読売新聞」H27.5.24)

自立促進と介護予防研究チーム

非常勤研究員 新川 祐利

- 「高齢者4割 薬6割以上 在宅服用者体調不良招く恐れ」

(読売新聞社「読売新聞」H27.6.11)

福祉と生活ケア研究チーム

研究副部長 大淵 修一

- 「『健康寿命』を延ばしてピンピン老後を目指す！」

(中央公論新社「婦人公論」2015年7月28日号 H27.7.14)

編集 後記

今回の「葉の温故知新」の記事では、一般的に使用されているお薬の中に、元々は違う目的で開発されたものがあることが紹介されました。私は、夏バテ防止のためにお酢をジュースで薄めて飲むようにしていますが、お酢は食事だけでなく、掃除や虫除けなどの他の用途にも使うことができます。これ以外にも、私たちの生活の中には、新たな使い方ができるものがあふれているはず。人々に役立つような発見は、案外身の回りに溢れているのではないかと考えると、日々の生活が彩り豊かなものに感じられました。

(新米)



平成27年9月発行

編集・発行：地方独立行政法人 東京都健康長寿医療センター 東京都健康長寿医療センター研究所（東京都老人総合研究所）編集委員会
〒173-0015 板橋区栄町35-2 Tel. 03-3964-3241 FAX.03-3579-4776

印刷：コロニー印刷

ホームページアドレス：http://www.tmghig.jp/J_TMIG/J_index.html

無断複写・転載を禁ずる

R100
古紙配合率100%再生紙を使用しています